

# きずな

いのち。つながるマガジン

Vol.2

2010.3



ぼくたちの生きる場所

〜今を生きる君に伝えたいこと〜

# ぼくたちの 生きる場所

～今を生きる君に伝えたいこと～

君

君に、僕が遠い砂漠の国を旅した時のことを話そう。日本から何千キロも離れたその国は、見渡すかぎり砂漠が広がっていて、その中にはぼつんぼつんと島のように人々の暮らす街がある。そこに暮らす人の多くが、戦争や迫害によって家族や友だちを殺されたり、家や街を壊されたりして、生きる場所を奪われて隣の国などから逃げてきた人たちだ。そしてどの街にも、学校に行かず働いている子供たちがたくさんいる。経済的に貧しい国々では、大人たちに安い給料で無理やり働かされて、苦しんでいる子供たちも多いそう。どんな国であっても、そんなことは許されるべきではない。でも、僕がこの国で見たのは、家族や親族の生活を助け、社会の一員として、生きがいと誇りを持って働いている子供たちの姿だった。そして驚かされたのは、その子供たちの目だ。見知らぬ僕を少しも怖れることなく、真つすぐに見つめるその目は、とても高く力強い光を持っていた。自分が誰から必要とされ、なぜここに生きているのかを知っているかのようにだった。僕はその目に映る光が、彼らの「生きる力」そのものだと思った。彼らが毎日過ごしているのは、日本の学校や塾やスポーツクラブのように、大人が用意してくれた安全な場所ではない。様々な人種や国や職業の人間たちがゴチャゴチャと行きかう場所だ。そこで彼らは生きるために物を売ったり、サービスをしたりしてお金を稼いでいる。お客や取り引き相手は、ほとんどが大人や外国人で、彼らにとって好きな人もいれば、嫌いな人もい

すると、彼はあっさりこう答えた。「ここには生きていくための「すべて」があるんだ。だから僕はここを出て行くなんて思わないよ。ここが僕の生きる場所さ。」赤茶けた砂と岩以外に何も無いと思っていた砂漠を、僕はあらためて眺めてみた。

日本に生まれてきた僕たちは、ほとんどの人が当たり前にご飯を食べ、当たり前にご飯を学校へ行っている。お金があればおいしいものを好きなだけ食べられるし、好きな服も着られる。みんなが持っているおもちゃやゲームだって買える。本当に豊かで幸せな国に生まれてきたと思う。もちろん、この国にもお金や食べる物に困って、苦しんでいる人がいることも事実だ。でも中には、お金や物に不自由していないのに幸せじゃないと思っている人が、子供にも大人にもたくさんいる。それは、人間がお金や物だけでは幸せになれないからだと思う。こんなことを言うと、大人たちの中にはこう言う人もいる。「私たちが子供の頃は、貧しくて好きなものも買えなかったし、貧しい国では子供が飢えて苦しんでいるのに、幸せを感じられないなんて、今の子供たちはぜいたくだ。」でも、この国には、生きていることが苦しくて、心を閉ざしたり、人を傷つけたり、自分の命を絶つてしまったりする人がたくさんいるということがある。忘れないでほしい。生きていると苦しいことがたくさんあるんだ。生きていると苦しいこと、怒りや憎しみや悲しみといった感情におそれるし、歳をとれば老いていかなくてはならないし、若くてもいつ病気になるかわからない。愛



①コーヒーを売る少年。父親の仕事を手伝っているという。②手作りのおみやげを売っている13歳の少女には、子供がいる。写真/久保 紫・月原秀宣  
③ベドウィンの少女。もの心もつかないころから、親の仕事を見て育つ。(いずれの写真もヨルダン)



たくさん命に願われて、僕たちは生きている。(明専寺土曜学校) 写真/井上貴裕


るだろうし、中には危険な人もいるだろう。しかし、好きとか嫌いとか、取っつきやすいとか怖いとかは言っていられない。食べていくためにどうしたら物が売れるのか、どうしたら人に喜んでもらえるのか、といったことを色々な人に会って、見たり聞いたり話したりしながら学んでいかねばならない。だから学校に行かなくてもお金の計算も外国語も社会のしくみも覚えてしまおう。ただ、教科書もないし、先生もいないので、一つ一つ自分で考えて自分でやってみるしかない。だからすぐには覚えられないし、失敗したり、怖い目にあったりすることもあるだろう。それはとても面倒くさくて危険なことだけれど、自分で考えて、自分で工夫してできた時は、すごく嬉しいし、自信になると思う。また失敗したり悩んだりした時は、大人の姿を見て学んだり、他人に助けを求めたりして、たくさんの人に支えられて生きていることも実感するだろう。そして誰かの役に立ったり、喜んでもらえたりしたら、家庭や地域や社会の中で、自分が必要とされていると感じられるだろう。そうしたら、たとえ学校に行けなくても、どんなに貧しくて、今、ここに生きていることには意味があるんだ、と思えるんじゃないかな。そしてその喜びや自信は、彼らの「生きる力」になって、あのような目の輝きを生むのかもしれない。それともうひとつ、忘れられない出会いがあった。砂漠に暮らすベドウィンといわれる遊牧民の青年、サラメのことだ。広い砂漠の真ん中で、僕は彼にこんなことを聞いた。「何も無い砂漠を出て都会に住みたいとは思わないの？」

する人が死ぬという悲しみや、自分が死ぬという不安も必ずいつかはやってくる。戦争や災害や貧困なども、自分ではどうしようもない大きな力によって起きる。誰でもこうした苦しみをかから逃れたいと思うけど、自分ではどうすることもできないから苦しいんだ。お金や物がたくさんあっても一時的にごまかすことはできても、結局こうした苦しみが逃れることはできない。だからこそ、「自分がたくさんの人や命とつながっている」ということ、「誰かが自分を必要としてくれている」ということ、そして、「今、ここに生きていてよかったと感じられる」ということが、こうした苦しみや悲しみを乗り越え、世界を変えていく勇気や希望になるんだと思う。もし、そう感じる事ができなかつたら、僕たちは孤独や不安にのみこまれて、苦しんで、悲しくて、生きていくことができないだろう。

今、君が孤独や不安を感じているとしたら、どうか遠い砂漠の国で生きている子供たちのことを思い出してほしい。そして、君の近くで孤独や不安を感じている人がいるなら、どうか伝えてほしい。「僕たちは、この世界に必要とされているから生まれてきたんだよ。見えないけれど、たくさん命に願われて僕たちは生まれきたんだ。君も僕も、そんなすべての命のために、今ここに生きているんだよ。だからどうか忘れないでほしい。必要のない命なんてひとつもないんだ。すべての命がつながりあって、この世界はできているんだよ。そう、ここが僕たちの生きる場所さ。」って。

(文/月原秀宣)





シリーズ  
「いのちのかたち」

一九九九年、一年間に全国で殺処分された犬と猫の数は、55万5,282頭。\*1これは、一日に約1,520頭、つまり一分間に一頭が殺処分されていたことになる。十年後の二〇〇八年には、26万8,790頭\*2と約半数近くまで減少してきているものの、その数以上に驚かされるのは、殺処分されているほとんどがペットとして飼われていた犬猫であり、この中には商品として繁殖、販売されていた純血種も多く、人間の利益のために大量に生産され、利用価値がなくなるとごみ同然に捨てられ、大量に殺されているということである。しかもこの無益な行為は、私たちの税金を使って全国で毎日のように繰り返されているのである。

殺処分とは、行政が「保護(捕獲)」や「引き取り」した犬猫を何らかの方法で殺すことである。殺処分の方法は自治体によって違いますが、ほとんどの場合が炭酸ガス(二酸化炭素)による窒息死で、「安楽死」とされているが、実際に私たちが目にしたのは、狭いガスマンに閉じ込められ、不安と苦痛の中で死んでいく犬猫たちの姿であり、安楽死と言えらるものではない。他にも筋弛緩薬や麻酔薬などを注射する方法もあるが、ほとんどの自治体が炭酸ガスを使用している理由は、安価で効率が良いからである。

長野県内における犬猫の殺処分数は、一九九九年には5,900頭(犬2,077頭・猫3,823頭)であったが、二〇〇八年には3,893頭(犬605頭・猫3,288頭)とや

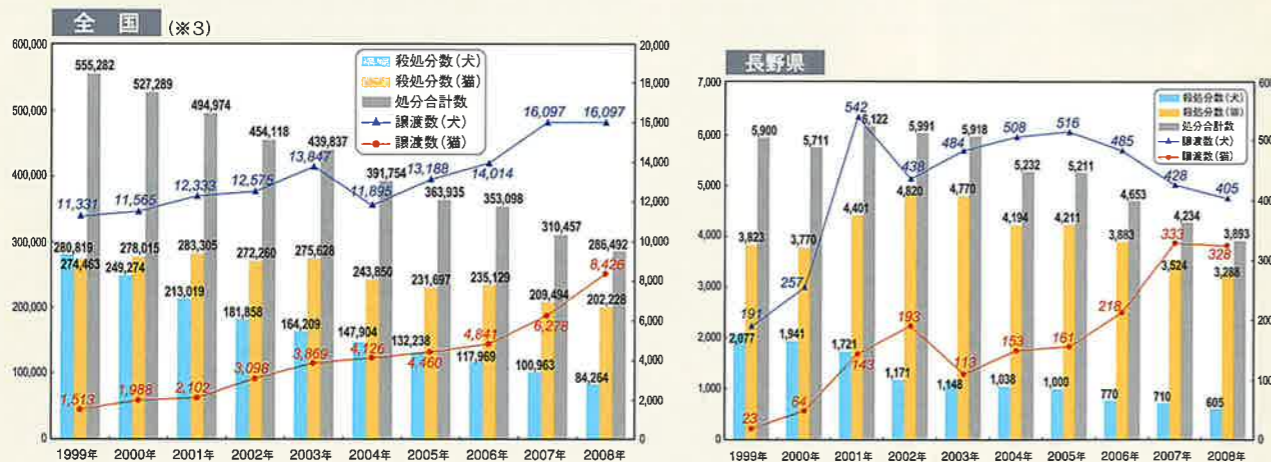
### 一分間に一頭が殺処分



写真/藤沢文俊・熊木昭園

上 サービスエリアに置き去りにされた犬。右 虐待で片目を失った犬。左 保健所に持ち込まれた子猫。人慣れした様子から飼い猫とわかる。

### 犬猫殺処分数・譲渡数推移 (1999~2008年度)



「家で死なれると困るから。」所有者不明の犬猫が保健所に保護されると、二日間公示され飼い主を探す。長野県内などの保健所ではこれ以降もできるだけ飼い主を探すが、見つからなかった場合は、人になつかか、危害を加えるおそれがないかなどの審査をし、譲渡可能と判断されると、ホームページに掲載するなどして譲渡先を探す。健康な子犬の場合は、不妊手術などを受けて譲渡会に出されることもある。こうした取り組みの結果、犬に関しては、現在その多くが飼い主の元へ返還されるか、譲渡されている。しかし、譲渡が不可能と判断されたり、譲渡先が見つからなかったりした場合は殺処分となる。また飼い主が直接持ち込む「引き取り」の場合、譲渡が難しいケースも多く、そのほとんどは殺処分となる。猫の大半がこの「引き取り」で、持ち込まれる数が減らないため譲渡が追いつかず、ほとんどが殺処分となっている。持ち込む理由としては、飼い主の引越しや出産、高齢化や入院などの他にも、「子犬や子猫がたくさん生まれてしまったから」、「高齢や病気の犬猫の世話が大変だから。」

### 捨てられるいのちたち



※1・2・3 地球生物会議ALIVE「全国動物行政アンケート結果報告書」より



7 ケージに入れられたまま殺処分機へと送られる。8 ドリーム室の扉が閉まる。9 係員がスイッチを入れると炭酸ガスが注入される。10 2分もすると、口を大きく開けてあえぐように呼吸し始めた。そして全身がガタガタと震え出し、突然床に倒れた。しばらく空気を求めるようにもがいていたが、次第にその動きもゆっくり、そして小さくなっていった。やがて呼吸が止まり、その後しばらく痙攣(けいれん)が続いた。11 死に至るまでの10分近いこの出来事を見れば、彼らが「安楽死」でないことが、はっきりとわかる。12 猫たちは数匹まとめて麻袋に入れられ、鉄製の箱の中にガスを注入して一晩置く。この日も20匹以上が処分された。13 犬猫の死体は巨大な焼却炉に投げ込まれ、翌日焼却される。



1「ドリーム室(ドリームボックス)」と呼ばれる殺処分機。2 その殺処分場は山間にひっそりと建っていた。3 殺処分の方法は炭酸ガス(二酸化炭素)による窒息死。4 薄暗い建物の中に、殺処分のための機械が並び、殺される犬猫たちが最後に見る風景だ。5 専用トラックが保健所を回って犬猫を回収する。6 自動追込み機の鉄の壁が迫り、犬たちをケージに追い込む。

り去ろうとしている、人間社会の重く暗い罪を、彼が自ら背負って歩いていくように思えた。

殺処分場で作業員として勤務する元木さん(仮名)は、毎週回収されてくる犬猫を三宅さんと共にドリーム室(ドリームボックス)と呼ばれる殺処分のためのガス室へと送り、最後を見届ける。特に子猫は呼吸が浅いため、ガスを注入した箱の中に一晩置いて絶命させなくてはならない。翌日、死体を焼却炉で二〜三時間かけて焼くが、この時まんべんなく火が回るよう三十分おきに焼却炉のふたを開けて攪拌するのも元木さんの仕事だ。

「誰かが(殺処分を)やらなければならぬのなら、自分がやろうと思う。」と元木さんも言う。彼は保健所を退職した後、誰もやりたがらないこの仕事を自ら引き受けて続けている。しかし一方で、「人間の利益のために多くの犬猫が売買され、安易に購入した飼い主が無責任に捨てたり、処分を依頼したりする現状を何とかしないとこの仕事はなくなり、と厳しい口調で語る。

秋の処分場の庭には、たくさんのアケビが実っていた。元木さんは熟して口を開けた実を私たちにいじりながら、「本当はこんな施設は、あるべきじゃないんだ。」と、ぼつりと言った。一体どれだけの苦悩を抱えながら、元木さんたちは、その手で殺さねばならなかった命たちと向き合ってきたのだろうか。薄暗い処分場の中で、終わることのない彼らの仕事。それをさせているのは、命を見捨てる飼い主たちと、それを傍観しているだけの私たちに他ならない。

で死なれると困るから。」など、人間側の様々な事情があるにせよ、犬や猫たちにしてみればどれも身勝手な都合でしかない。

**「死ぬまで自分だけが命だ。」**

今回取材した殺処分場では、該当する地域の保健所等で保護・引き取りされた犬猫が、毎週一回集められ、その日のうちに殺処分される。処分の方法は、炭酸ガスによる窒息死である。保健所に勤務する三宅さん(仮名)は、十数年、犬猫の殺処分を担当している。しかし、日々のほとんどは、犬猫の捕獲や引き取り、保護した犬猫の世話や譲渡先探し、住民からの苦情処理などに追われ、犬猫を持ち込む飼い主に対しては、思い直すよう説得などもする。「本来は飼い主が動物病院に連れて行き、注射などで安楽死させるべきで、そうすれば殺処分も減るでしょう。いくら保健所が引き取ったとしても、殺処分をするのは私たちではなく、あくまで『飼い主自身』だということを忘れないでほしい。」と、無責任な飼い主に対する憤りを隠さないが、「人と話すのは楽しい」と、住民からの苦情を何時間でも聞く根っからの人好きでもある。

「動物が好きだからこそ、誰かが殺さなければならぬのなら、せめて自分がやってあげたい。たとえ少しでも犬や猫たちが恐怖や苦痛を感じないようにしてあげるのが私の使命だと思っています。」と言う三宅さんだが、殺される直前の犬猫たちは自分の運命を知っているかのように、じつと静かに三宅さんの目を見つめるという。私たちが都合よく闇に葬

## ペット消費大国の闇

全国のどの街にも大小様々なペットショップが並び、あらゆる生き物が手軽に手に入る。ホームセンターなどでは、日用品のついでにペットを買うこともできるし、インターネットの通信販売では、生きた犬猫が直送されてくる。近年の不況にも関わらず、ペット関連市場の売上は右肩上がり、今や1兆数千億円とも言われる。その陰で、膨大な数のペットが生産消費され、商品価値がなくなると大量に処分されていることは容易に想像がつく。犬猫の殺処分はそのほんの一部に過ぎない。

ブリーダーと呼ばれる繁殖業者の中には、繁殖のためだけに犬猫を狭いケージに押し込め、産めなくなるか、死ぬまで出産させ続ける者もいる。また生まれた子犬や子猫は、すぐに母親から引き離され、価格が下がる前にペットショップなどに売られていく。過剰な繁殖により、病気や障害をもって生まれてくるものも多く、生まれてすぐ親元から引き離された子犬には、様々な問題行動が出ることも分かっているが、何も知らされないまま飼い主の元へと売り渡されていく。出産できなくなったり売れ残った犬猫が、保健所に持ち込まれたり、山中に放置されたりすることも珍しくはなく、実験用動物として大学や企業に払い下げられていたことも過去にはある。

日本にはこうした悪質な業者や飼い主に対する法的規制はあるものの、誰でも簡単にペットの繁殖や販売ができるし、虐待の定義も曖昧で厳罰もないため、実効性に欠けているのが現状だ。規制の厳しい欧米では、ブリー

どで活動している「ねこの会」では、県と共同で個体調査や不妊手術の補助を行うなどして、地域猫の普及に努めている。二〇〇〇年に駒ヶ根市で起きた三十一匹の犬置き去り事件をきっかけに結成された「ハッピーテール」では、捨てられたり虐待を受けたりして、心と体に傷を負った犬猫の保護やケアを行い、新しい飼い主を探す活動などを行っている。

こうした人々の地道であきらめない活動が、地域住民や行政の動物愛護に対する意識を変えてきた結果、全国的に殺処分数が減ってきていることは、何より私たち人間にとつての救いである。殺処分0を宣言した熊本市をはじめ、各自治体も様々な取り組みを始めている。国もようやくではあるが、業者の登録制度や、悪質な飼い主や業者の規制に乗り出した。ペットの個体情報を入れたマイクロチップの義務化も待たれるところだ。

## 「地獄は一定すみかぞかし」

「地獄は一定すみかぞかし。」歎異抄(※1)に残された親鸞(※2)の言葉には、多くの命を奪いながらも、果てることのない欲にまみれてしか生られない人間の姿が、深くえぐり出されている。そして地獄こそが自分の生きていく世界だと、「生きる」ということ、どうしようもない罪を背負いながら生きていこうとする、親鸞の生き様がそこにはある。

私たちは、日々、多くの命を奪いながら生きていく。どんなにきれいなことを言っても、「生きる」とはそういうことだし、奪った命の叫びや悲しみを背負っていくこともある。自



1 生後40日の子犬は商品としてショーケースの中で過ごす。早くに母親や兄弟から引き離されると、様々な問題行動が起こることがわかっている。2 ペットショップはいつも家族連れやカップルたちでにぎわっている。



3 ハローアニマルでは、第2・4の土曜日に譲渡会が行われている。4 長野県動物福祉協会が行っている不妊手術キャンペーンは、県外から来る獣医師や地域住民がボランティアで支えている。一日で80頭の手術を行うこともあり、野戦病院さながらである。5 持ち込まれた猫に麻酔をかけ、術前処置と予防接種をする。



ダーは免許制で、個人の飼い主に対しても厳格にペットの取り扱い方を定めている。もし虐待などが認められた場合には、日本とは比較にならないほど高額な罰金や実刑が課せられる。ペットショップで直接犬猫を売買することを禁じている国も多く、犬猫を飼いたい人は、シェルターと呼ばれる保護施設などから譲渡を受けるのが一般的だそうである。これらの国の中には、ドイツのように犬猫の殺処分そのものを廃止している国もある。

この空前のペットブームをつくり出しているのは、生き物を玩具やファッション感覚で売るペット業界や、それをあおっているマスメディアであるとも言える。しかし、その背景には家族や地域の間で失われつつある絆や温もりを、もの言わぬ従順なペットたちで必死に癒そうとしている孤独な現代の人々の姿も見えてくる。

## 殺処分をなくす取り組み

長野県内で二十年以上活動をしている「NPO法人・長野県動物福祉協会」では、なかなか減らない猫の殺処分をなくしていくと、外猫や野良猫の不妊手術を推進する活動を続けている。県外の獣医師や地域のボランティアの協力で、手術費用を半分程にするなどして、これまでに約5千頭の不妊手術を実施してきた。他にも犬のしつけ教室や講演会、チャリティコンサートなどを開催し、人と動物が豊かに暮らせる地域づくりを目指している。また、地域の中で適切に飼育管理する「地域猫」という考え方も全国で広がっており、松本市な

分の命を「生きる」ということは、この命が生まれ、生きるために奪ってきたすべての命とともに「生きる」ということではないだろうか。

安全・便利・快適で、豊かな暮らしを手に入れるために、私たちは数え切れない命を犠牲にしている。そこには、殺処分されている犬猫たちの他にも、過剰に生産され廃棄されている食用動物や、苦痛の果てに殺されている実験動物、毛皮を取るために量産され殺されている動物たち、そして、目に見えない無数の命の犠牲があることを忘れてはならない。欲望のままに奪い続けているこれらの命は、「私の命そのもの」であり、そこから私たちが目を背けている限り、この無意味で悲しい殺戮が終わることはない。そして、この先に人間だけの幸せな未来などあるはずもない。

殺される直前、私を見つめていた犬と猫たちの目。あの深く澄んだ目の奥に映っていたのは、私たち人間の真実の姿だ。彼らは命のすべてを掛けて、私たちに人間の悲しい姿を見せてくれたのではないだろうか。ともに「生きる」すべての命のために、今、私たちができることがきつとある。

### 【掲載機関の連絡先】

ハローアニマル(長野県動物福祉センター) ☎026677(2)45071  
NPO法人・長野県動物福祉協会 ☎026633(2)51707  
ねこの会 ☎026633(2)21902  
ハッピーテール ☎0900(2)6714570

今回掲載されました殺処分場及び関連機関の皆様には、一部からの抗議も予想される中、殺処分のありのままの現実を広く知ってもらい、不幸な犬猫たちをなくしていきたいという願いから、取材に協力いただきました。

※1 親鸞の弟子、唯円が書いたとされる仏教書。 ※2 鎌倉初期の僧侶。浄土真宗の宗祖。

■真宗ファミリーフェスタ  
2009年10月24日



「家族そろってお寺に来てもらおう！」と長野別院で開かれている恒例のイベント。つきたての餅やキノコ汁が無料でふるまわれ、地元で採れた新鮮な野菜や果物、日用品が並んだチャリティーバザーなどでにぎわう境内の様子に、通り掛かった人も思わず足をとめて楽しんでた。

公開シンポジウム  
■「いのち・環境・戦争」  
持続可能な社会の構築とは  
田中 優 [講演会]  
2009年10月19日



銀行や郵便局に預けているお金が、大国の戦争の武器となる…。市民から預かった資金で積極的に環境事業を展開している「未来バンク事業組合」理事長の田中優さん。環境と平和、戦争とお金の関係についての話は、まさに「目からウロコ」だった。

■STCテニスクャンプ2009  
2009年10月10日～11日



サンガテニスクラブ (YBAながの) 恒例の合宿。峰の原高原のさわやかな空の下で思いっきり汗をかいて、夜は満点の星空を眺めながら仲間と心ゆくまで語り合う。そんな青春の1ページのようなひと時に、心も体もリフレッシュ！

■ソニオ&ビハーラ バザー  
2009年4月29日



福沢ふじ子さん (ビハーラ長野) の想いから始まった、駒ヶ根市の軽食喫茶「ソニオ&ビハーラ」のチャリティーバザーが開催された。たくさんの日用品や食品が並び、手作り焼きそばや五平餅も好評だった。売上金は「松本カンガルーの会(病気の子どもとその家族を支える会)」へ寄付された。

■川越組 お待ち受け法要  
2009年4月19日



親鸞聖人750回大遠忌に向けて川越組 (中野市など) では、門徒たちが中心となり法要をつとめた。そして落語家の樋口強さんの高座「生きているだけで金メダル」では、自身の闘病生活から、たくさんの笑顔に囲まれ「生きていて良かった」と気づかされたという体験が語られた。

■パラリンピック  
井上真司選手壮行会  
2010年2月18日



バンクーバーパラリンピックに出場する顕正寺住職・井上真司さん (上田市) の壮行会が長野別院で開かれた。全国から寄せられた協賛金145万円が井上選手に贈られ、日本のアルペンスキーチームを代表して青木辰子選手 (長野市) へも50万円が手渡された。

トレイル  
■しんらん踏道 ~戸隠古道編②~  
2009年10月31日～11月1日



「慌ただしい日常を離れ、ゆっくりと大地を踏みしめて歩く…。」2回目となる今回は、長野駅から西長野経由 (観音石仏古道) で戸隠奥社に至る25kmと12kmのルートと、それぞれの体力と目的に合ったコースを選択して歩いた。全国から集まった44名の参加者は、奥信濃の大自然と悠久の歴史を「心と体で感じる」2日間の旅を満喫した。

■ビハーラ講座・長野別院人生講座  
2009年8月1日～2日



藤野豊さん (富山国際大学准教授) を招き、社会の発展の陰で排除されてきた人々の歴史から、差別の現実を学んだ。差別問題や人権問題は抽象的な議論ではなく、苦しみ虚けられている人々の声を直に聞くことが、何よりの気づきになるとの講演だった。

■新門 教区巡回  
2009年6月10日～11日



本願寺後継者である大谷光淳さんと妻の流豆美さんが初めて長野教区を訪れ、意見交換会などが行われた。二人を囲んだ懇談会では、YBAながの委員長・井上貴裕さんの活動紹介や、声楽家・狭間壮さんのコンサートなども開かれた。

●死に／を学ぶ会

ビハーラ長野が長野市内の喫茶店で開いている学習会で、誰でも気軽に参加、発言できる。

2009年度の発題者とテーマ

【第53回】山口長志さん (みどりの会 会長)

「本物が見えなくなる社会で生きるには」

【第54回】狭間 壮さん (声楽家)  
「どっこい生きてしまった」

【第55回】谷口向覚さん (学習塾寺子屋 NPO法人あんしん寺 理事長)

「不登校・ひきこもりから離婚、犯罪被害まで、社会・家庭の様々な出来事のなかで…」



■YBAスノーキャンプ in 池の平  
2010年2月20日～21日



長野教区仏教青年連盟 (YBAながの) 主催のスノーキャンプが行われ、全国からウィンタースポーツ好きの若者が集まった。夜にはアロマハンドマッサージ教室などのイベントが行われ、冬の信州でのトキメキと癒しに満ちた時間を過ごした。

■千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要  
2009年9月17日～18日



国立千鳥ヶ淵墓苑で毎年行われているこの法要は、人類がおこした全ての戦争による犠牲者を悼むもので、長野教区からは44名が参加した。その後訪れた国会議事堂では、葉書エイズ訴訟原告で参議院議員の川田龍平さんから「地球温暖化防止と非戦平和」について話を聞いた。

■非戦の鐘  
2009年8月15日



敗戦記念日の8月15日。長野県内の浄土真宗本願寺派の各寺院では、地域の人たちにも呼びかけ、午前11時から同時に梵鐘を撞き、非戦・反戦への誓いを新たにす。



KIZUNA  
Library おすすめBOOKS



ぼっちゃん

井上夕香(著)・小関左智/小学館/¥1,470

ペットショップのかわいい子犬たちの母親は、どこでどうしているのでしょうか。この物語はボランティアの人たちの活躍で、悪質なペット業者の手から救出された繁殖犬たちの、愛と感動のドキュメンタリーです。



まこという名の  
不思議顔の猫

まこという名の不思議顔の猫

前田敏子・岡優太郎/マール/¥1,575

ブログで人気沸騰!切な癒し系猫「まこ」の本、初登場!こんな猫の本、なかった…。かわいくなっておかしくて、最後に…泣けてしまう!すこしだけ、かならず、幸せになれるはず?



レクイエム  
どうぶつたちへの

どうぶつたちへのレクイエム

児玉小枝/日本出版社/¥1,260

人間に捨てられ、動物収容施設で命を絶たれていった動物たち。彼らの瞳が、声なき声が、この悲しい現実を訴えています。多数の写真と総ルビの簡潔な文章で小学生にも理解できる内容です。



誤解だらけのうつ治療

蟻塚亮二・上野玲/集英社/¥1,260

「死にたいのではない。よりよく生きたいからうつになる。」うつ病体験のある精神科医とジャーナリストが、誤解された医療と薬の現実を通して、うつ病との上手なつき合い方を教えます。



動的平衡

福岡伸一/木楽舎/¥1,600

生命とは何か?生きているとはどういう状態なのか?を紐解く異端の分子生物学者が語る「いのちの不思議」。今まで体験したことのないサイエンス・ストーリーです。読んだら世界がちがってみえるかも。



戦争をやめさせ  
環境破壊をくいとめる  
新しい社会のつくり方

田中優/合同出版/¥1,470

戦争をやめさせ、地球温暖化をくいとめる…そんな新たな社会づくりの方法。地球上にある様々な問題を明快に分析して、今すぐ私たちが出来ることを具体的に教えてくれる本です。



女性のからだの整体法

からだの悩みを解消する  
6つのテーマと四季のお手入れ

野村奈央/七つ森書館/¥1,260

「からだは自然の一部です。」ストレスの多い現代社会で、生理痛・肩こり・更年期障害・妊娠・出産など、女性が自らの力で元気に乗り切る方法や、家族みんなのできるセルフケアが満載。



落合務シェフのイタリアン

ーラ・ベットラ・ダ・オチアイー

落合務/特選実用ブックス/¥1,575

落合務シェフのフレンドリーな人柄がにじみ出るようやさしい文章と写真が、きっとあなたを本格的でおいしいイタリア料理店のシェフにしてくれますよ。

おすすめDVD



動物たちは訴える

地球生物会議(ALIVE)制作/68分/¥4,500

TEL:03-5978-6272

URL: <http://www.alive-net.net/>

人間の都合で、繁殖させられ、捨てられたり、殺される運命のペットと呼ばれる動物たち。ペットがモノとして大量消費されることの問題を一緒に考えてみませんか。どうか、声のない動物たちの訴えに耳を傾けてください。

おすすめMOVIE



犬と猫と人間と 上映中

監督/飯田基晴  
制作/映像グループ ローポジション

町を歩けばあちこちで目にする光景があります。それは、散歩中の犬や、路地裏でくつろぐ野良猫たち…。しかし、全ての犬と猫が幸せな一生をおくれるわけではありません。空前のペットブームの陰で一日に1000頭近くが殺されていく。捨てられた命を救おうと奮闘する人々の姿、そして知られざる多くの事実を丁寧に描写しています。

自主上映会をしませんか?

あなたが発信源になって、  
上映会を企画してみませんか?  
詳しくはコチラまで。

合同会社東風  
TEL03-5155-4362

<http://www.inunekoniningen.com/>